中世初期ベンガルの書記集団
―碑文から読まれるその台頭と多様な活動―

古井龍介

（東京大学東洋文化研究所教授）

近代ベンガルにおいて、ブラーフマナ（バラモン）やヴァイディヤ／アンバシュタ（医師）とともにジャーティ（カースト）秩序の最上層を占めたのは、カラナ／カーヤスタと呼ばれる書記集団である。彼らは近世・近代の歴史過程を通してジャーティとして凝集していったが、この発展に一定の方向性を与えたのは、それに先立つ中世初期の歴史過程であり、エリートとしての台頭もまた、その結果である。本講演では、南アジア中世初期史の主要史料である碑文史料から、書記集団の台頭および原ジャーティ的集団形成の過程を跡づけ、それと関わる彼らの多様な活動について論じる。さらに、中世初期の歴史変化との関連から書記集団とその活動を捉えることを通して、当時のベンガル社会において書記集団、ひいては識字エリート層が占めた特異な位置についても考察する。

五～六世紀のグプタ朝による北ベンガル支配の下、書記集団は商工集団とともに都市有力者層を構成し、その長は都市合議体の一員として周辺農村部における土地売買手続きにも関与していた。六～七世紀にベンガル内下位地域で興った在地王権の下でも、書記集団は農村部行政組織の構成員として、台頭する土地保有有力者との協力関係を築きつつ土地売買手続きへの関与を継続した。八～一二世紀のパーラ朝支配下、書記集団の一部は王権発行の銅板勅書を銘刻する世襲の専門家集団として家系・拠点村落を確立し、また軍事を含む王権への奉仕により従属支配者としての地位を獲得した。これらに加え、書記集団に属する家系相互の婚姻関係も結んだ。以上のような活動を通して、書記集団が有力な内婚集団として発展していく素地が形成された。同様の過程は同時代の他の職能集団にも見られたが、軍事エリート層の欠如と商人集団の存在の弱さという、中世初期ベンガル社会の特徴は、書記集団を含む識字層が台頭する条件の一つであった。